

# ～ 抄 録 ～

〔論 説〕

## 大学生の性格における年代的变化

中 村 晃

本研究では、千葉商科大学の学生の性格傾向の変化を、1980年代、1990年代、2000年代と年代を追って、YG性格テストにより性別および学科を考慮に入れ、検討することを目的とした。

その結果、大学生の性格傾向は変化してきており、感情的な繊細さ、行動面における積極性のなさ、対人関係における消極性が増したことなどが、主な特徴として挙げられた。このような変化は、社会でよく語られる最近の若者の変化と一致する結果であったが、必ずしも否定的なものとは捉えられないことが示された。また一般に、女子学生の積極性と男子学生の消極性が対比されることが多いが、男女別に検討した結果、男女とも消極的な方向に変化していることが示された。また、学科別に検討した結果、年度ごとの学科間に一貫した性格的な傾向は認められなかった。これは、商学科、経済学科、経営学科はいずれも商経学部という単一の学部の中の学科であり、学ぶ授業に大きな差がないためであることが予想された。

このように、全体として大学生の性格傾向は変化しており、今後の教育を考える上で、このような性格傾向の変化を考慮に入れた生徒への対応を考えていく必要性が示唆された。

## 孟子の良心哲学論

—良知良能と関連して—

浅 井 茂 紀

この論説は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第1節孟子の良心の創始、第2節孟子の良心と良知良能、第3節孟子の良心と四端の心、第4節孟子の良心と仁義、第5節孟子の良心と礼智、Ⅲ結論（注付）、から成立している論文である。

今日使われている「良心」の語源は、中国戦国時代、性善説の孟子が、「良心」の熟語

を最初に使用したのではなかろうか、ということの問題にした。さらに、良心と仁義や良知良能とのかかわり、良心と仁義礼智の四端の心や四徳との関連を問題にした論文である。また、孟子の哲学における良心と良知良能との関連などを、分析、総合してロゴス (logos) 的に体系付けてみた。哲学、道徳や倫理学、心理学などにおいて、「良心」(Conscience) は、一學術用語にとどまらず、人々の「人間のあり方」として、世界的にもその普遍的な価値があると思われる。

かくして、論者は、現今の「良心」の漢字・熟語は、堯聖・孟子の言葉に由来すると考える。その根拠として『孟子』書 (告子上) の出典箇所を挙げて説明した論説である。

## メタファーの図式化

高木道信

遠くギリシャ・ローマの修辞学 (rhetoric) に端を発し、隠喩 (metaphor) に関する議論は数限りなく展開されてきた。メタファーの概念は、さまざまな学問分野に輻射するものであり、文学・言語学・心理学の分野で異なるアプローチが取られるのは当然のことであろう。だが、その議論がどのように展開されようとも、対比されるA、B両者間の特性違反 (feature violation) の仕組みを解明することが研究の中核をなす。隠喩の研究に際して配慮すべき点が2つある。第1は、広義の隠喩 (つまり、比喩的表現一般) と狭義の隠喩との区別を明確に定めること、第2は、対比されるA、Bの特性および両者に付随する連想因子などの要素を、その隠喩の領域内で処理することである。

広義の隠喩の下位区分としての狭義の隠喩は、比較するA、B両者間の同義性・類義性 (synonym) に着眼点があり、両者間に近似 (similarity) の関係がある。同義性のメカニズム解明の鍵となるのは、狭義の隠喩・直喩 (simile)・擬人法 (personification)・換称 (antonomasia)・代称 (kenning) 等である。

小論は第12回JACET月例研究会 (1974年12月20日、語学研究所) で、筆者が発表した「メタファーの図式化」を発展させたものであり、メタファーを次の5つのタイプに分類した：1) 所有関係、2) 非支配関係、3) 支配関係、4) 評価関係、5) 解説関係。

## メルランの最後の日々

花 田 文 男

ロベール・ド・ボロンの『メルラン』の後には13世紀の初めに大別して二つの続編が付け加えられた。『流布本続編』と『メルラン続編』である。その淵源は散文『ランスロ』の冒頭に描かれたメルラン幽閉の短いエピソードにあるとされる。メルランは美しい少女に恋をする。彼女は後にランスロの養育者、守護者となる湖水の貴婦人である。メルランは悪魔の子の性を受けつぎ彼女を狂おしく愛する。最後には自ら教えた魔法によって眠らされ岩屋に閉じ込められる。もはや時代は変わった。古い主人公は新しい登場人物に席をゆずらねばならない。今やアーサー王を守る者はメルランではなく湖水の貴婦人である。このエピソードを核として二つの続編はそれぞれの仕方でメルランの最後を描いた。物語の枠を同じくしながらも、登場人物の性格などに小さくないちがいが存在する。本論は『ランスロ』および二つの続編でのメルランの幽閉にいたる物語の紹介を試み、あわせて三つのテキスト間の物語の異同の指摘におよぶ。

## マックス・リュートィのメールヒェンの様式概念

塩 谷 透

リュートィはフォルクス・メールヒェンの独自性は個々のモチーフにではなく、それが語られる様式にあるとして、その様式の特徴を表す様々な概念を提唱した。それによって彼が目指したのは、他の口承文芸のジャンルとの相違を、語りの様式を通して明確にすることであったが、同時に、一定の様式を持つものとしてメールヒェンを文学の一つのジャンルとして認知させることでもあった。その際、彼はヴォリンガーの抽象芸術についての理論に依拠した。ヴォリンガーは未発達なものと評価されていたエジプトの美術などを抽象衝動という観点から解釈し、稚拙と思われることが一つの様式の必然的な結果であり、ギリシアやルネッサンスの美術とは異なった基準で評価されねばならないと論じた。この美学は、同様の評価の下に置かれていたメールヒェンに対して、小説などに対するのとは異なる評価と理解の基準を構築することに努めていたリュートィにとっても有効なものだったのである。

## 畑地地域を流れる小河川への硝酸態窒素の負荷源と流入経路について：

### カナダ・オンタリオ州ストロベリークリークの例

杉 田 文

オンタリオ州南部の典型的な農業地域に位置し、高濃度の硝酸態窒素を有する小河川周辺で硝酸態窒素の分布および、河川への土壌水と地下水の出入りを調査した。本河川では上流3分の1の区間のみで地下水が河川に流入しており、その地下水中にスポット的に存在する高濃度の硝酸態窒素が河川水中硝酸態窒素の負荷源の一つになっていることがわかった。本河川下流部の緩衝帯中の地下水では硝酸態窒素の濃度低下が確認されているが、緩衝帯幅の狭い上流部では十分な濃度減衰が生じていないと考えられる。畑地の不飽和帯土壌水中硝酸態窒素は上層で高濃度、深さと共に濃度の減少が見られその濃度低下の反応速度係数は $10^{-3}$ から $10^{-2}$  (mg/1/day) と推定された。このことより不飽和帯ではかなりの脱窒によると考えられる濃度低下がおきていることがわかった。とうもろこし畑と大麦畑下では高濃度の硝酸態窒素が地下水面までに到達しており地下水汚染の負荷源となっている。本河川には8本のタイルの排出口および周辺ではミミズなどによる多数のマクロポアが確認されており、上流の地下水だけでは河川水の10mg/l前後の硝酸態窒素濃度を説明することができないことから、これらが不飽和帯上部から直接硝酸態窒素を直接河川へ流出させる経路となり、河川の高い硝酸態窒素濃度を形成する一因となっていることが示唆された。

## What Rappaccini's Hybrid Garden Signifies

OHNO, Misa

“Rappaccini's Daughter” is set in old Italy and appears to have no explicit relation to the United States of 1844. However, put side by side with the social background, biographies of Hawthorne, and his *Notebooks*, it seems to be involved in the mid-nineteenth-century American context, especially in race problems.

“Rappaccini's Daughter” presents the image of racial difference and the possibility of miscegenation. Beatrice is a hybrid of human and plant. She is also half-Westerner and half-Asian. Baglioni's fable of the Indian woman associates Giovanni with the Macedonian king Alexander, and Beatrice with the Indian woman. The love between Beatrice and Giovanni suggests the image of miscegenation. “Rappaccini's Daughter” is a story where

America, France, Italy, and the Orient confront each other. Hawthorne introduces to American readers a tale written by a French writer. The setting for the story is laid in Italy, where various elements of the Orient can be found.

While visiting Horatio Bridge in Maine in 1837, Hawthorne was given the name Aubepine by a German-Frenchman. He uses the French name as a pseudonym in “Rappaccini’s Daughter.” According to *American Notebooks*, during this trip he had a lot of chances to come into contact with non-Anglo-Americans. There is a possibility that Hawthorne’s experience in Maine to see many racially different people was one of the sources of “Rappaccini’s Daughter.”

Canonical American writers often take complicated attitude toward racial others in their works. Ambiguity seen in “Rappaccini’s Daughter” may reveal the anxiety of Hawthorne over the threat of racial mixture in antebellum America.

## 形式主義的正義原理の限界とその克服

### —正義と愛と人権の関係を軸として—

若林明彦

本稿は現代の正義概念の規範的モデルであるところのアリストテレスの正義原理（「等しきものは等しく扱うべし」）に遡り、それが現代では「経済のグローバル化」に伴いますます形式主義化し矛盾を生んでいるとし（例えば、特許権重視の経済システムが社会的弱者が必要不可欠の財やサービスを手に入れないという人権無視）、それを批判的に検討することによって、現代における真の正義原理の捉え方を提起するものである。その批判は福音書の「ぶどう園の労働者の譬え」の中で、愛という正義原理と対置される形で示されていた。神学研究者はこれを神的愛として捉えるが、それはむしろ基本的人権への配慮として解釈すべきである。実は、アリストテレスも形式主義的正義原理の暴走を抑制するためにエピエイケイアというもう一つの正義原理を提起していた。現代社会に求められる正義の原理は、社会的強者だけにしか通用しない「等しさ」に拘泥する形式主義的正義原理ではなく、社会的弱者をも包括した真の意味で万人が「等しさ」を享受できる原理でなければならない。